

無からの創造

— 古代教父思想における神の超越性 —

津 田 謙 治

一 問題設定

神による万物の形成を「神は無から創造を行った」と解釈することは、恐らく被造物としての人間と対比される神の超越性を描くものとしては極めて的確であろう。紀元後二世紀にローマやガリアで活躍した教父エイイレナイオスは「人間には出来ないことも、神にはできる」という福音書の言葉を引用しながら、「無からの創造」をまさに神のみが為し得る御業と見なし、人間の能力を遙かに凌駕する創造神の超越性を描き出している。

だが、教義史的にこの議論を見るならば、既にキリスト教成立以前にも確認されるこの「無からの創造」という思想は、単に創造者の超越性と被造物の限界性を明確にするために神学的な議論として確立されたのではない。紀元後二世紀前半から三世紀にかけての様々な教父の記述を詳細に追うならば、むしろこの議論がグノーシスなどの異端や、哲学などの、教会にとつて外的な影響によつて問題化を余儀なくされたものであり、更にこの議論に関しても教父によつて様々な解釈の変遷があった

ことを見いだすであろう。本研究では、紀元後二世紀及び三世紀における教父たちの「無からの創造」の解釈を辿り、この議論が問題とされるようになった要因を考察してみたい。

二 キリスト教成立以前

本来、「無からの創造」の解釈を教義史的に考察する場合、「創世記」におけるヘクサメロンの解釈に始まり、「第二マカバイ記」(七・二八)における神の創造の解釈に関する極めて断片的な記述、更にアレクサンドリアのフィロンによる、プラトン主義的色彩の強い創世記解釈などを踏まえた上で、教父たちの記述の分析を行うのが適切であろう。しかしながら、これらユダヤ教的な創造論解釈の伝統は、教父たちの思想に影響を与えていることは多分に推測することは可能であっても、主にここで取りあげる二世紀の教父たちが「創世記」における神の創造」の記述を神の「無からの創造」へと問題化した契機として十分なものは言えない。本稿の結論を先取りして述べるならば、二世紀以降の教父たちが神の「無からの創造」を問題化したのは、主にプラトンの『ティマイオス』やストア主義思想に多く見られる「アルケーの一つとしての質料からの創造」との対峙に起因すると言える。なぜなら、神が創造という御業を行う際に、既に質料が(神と等しく永遠なものとして)存在していたならば、その質料が備える(あらゆる被造物に対して)超越的な永

遠性とは、神のみが持つべき超越性と折り合いがつかないことになってしまふからである。フィロンはこのような質料観の孕む問題を十分に理解していたにも拘らず、特に神の超越性と質料の永遠性が互いに矛盾するものとは考えなかつた故に、このようなプラトン主義的解釈と『創世記』の解釈とを、記述の不明瞭性を補充しあうものと理解しているのである。この点に關しては、ユステイノスの立場も類似している。

三 ユステイノス

プラトン主義やストア学派、そしてペリパトス学派などを遍歴し、哲学的な探求の途上でキリスト教へと回心したユステイノスは、単純に哲学の限界を感じてキリスト教信仰に辿り着いたと言うことは出来ず、むしろ「愛知者(φιλολόγος)」としてプラトン主義的思考を多くの点で保持していたと言える。それは彼の「種子的ロゴス」論に留まらず、ここで問題となる創造論にも当て嵌まり、プラトンの「ティマイオス」におけるデミウログスによる宇宙創成論は字義通りに神が世界を創造した様子として理解されている。

「そして我々はこう教えられている。神は善き者であつて、最初における万物を形無き質料から(εἰς ἀσύνθετον)人間のために造られた」と(Apol. I. 10. 2.)。

「しかし我々の教師によつて、つまり預言者たちによつて語ら

れた言葉(λόγος)によつても、『形無き質料(ἀσύνθετον)を変へる(πτεράντα)ことによつて神は世界を造つたのである』というプラトンの言説が受け入れられていたということ(我々は)半々べきであらう」(Apol. I. 59. 1.)。

ユステイノスは『創世記』における神の創造という行為を、プラトンの「ティマイオス」やそれに基づいた当時の中期プラトン主義思想などと同様に「質料からの創造」として解釈し、神が創造の際に既に「あつた」質料から世界を創造し、秩序づけたと理解している。この質料が神と同様に永遠に存在していたのか、それとも神によつて質料も生み出されたのかは彼の文章からは判然としない。先に引用した「第一弁明」とは別の「ユダヤ人トリュフォンとの対話」においてユステイノスは「神のみが生まれざるもの(ἀγεννητος)であり、不滅である」と述べていて、そこからここでの「質料」とは生み出されたものであると解釈する可能性もあらう。しかしながら、「ユダヤ人トリュフォンとの対話」においてユステイノスは世界を含む被造物との対比において「神は生まれざるもの」であると理解しているのであり、「質料」が明確に被造物の一つとして位置づけられない限り、生み出されたものとして神と対比するのは困難であらう。だが、ユステイノスの思想的枠組みの大きな基盤となつている中期プラトン主義において「質料」が被造物であると理解することは困難であるし、神の超越性のためにそのような解釈を促す記述もユステイノスには見出せない。むしろ彼にとつて

の「質料」とは神が世界を創造する際の道具的役割を果たしているに過ぎず、それが生まれざるものであるのか、即ち神と等しく永遠なものであるのか否かに関する議論は欠如していると捉える方が適當であると考えられる。

四 タテイアノス

ユステイノスの活躍した紀元後二世紀のプラトン主義、即ちプラタルコスやアルキノスなどに代表される中期プラトン主義においては、プラトンの『ティマイオス』解釈に基づいて、質料とはイデアや神と等しく始まりを持たないアルケーの一つとして理解されていた。ユステイノスがこのようなアルケーとしての質料を、明確にはないとしても、『創世記』における神の創造論に取り込んだとするならば（恐らくそれは多分に推察されるのであるが）、質料もまた神と同様に永遠な存在であるという解釈の余地が残ることになり、二つの永遠なるものが存在することに於ては、ユステイノスの弟子であったタテイアノスは、現存する教父達の資料において、初めてこうした質料の永遠性を問題とし、神が質料を用いて創造を行ったのであれば、それは神に従属するものであると理解している。

「質料は、神のように始まらないもの (ἀρχή) ではなく、始まらないものであるが故に、神と等しい力をもつもの (ἐξουσία) でもない。生み出されたものであるが、他の何か

生み出されたものによって（生み出されたの）ではなく、万物の唯一の創造者によって (ἐκ τοῦ μόνου κτίστην δημιουργοῦ) 存在するようにされた (πρόβελήθη) のである」(A. d. Gra. V. 7.)。

タテイアノスによれば、質料とは始まりを持たない神によって存在するようにされたものであって、中期プラトン主義におけるアルケーとしての質料のように、創造者と等しく永遠なものとしては捉えられていない。タテイアノスはユステイノスよりも極めて批判的にプラトン主義的宇宙論を受容しており、当時のプラトン主義に多く見られた、イデアと神と質料という三つのアルケーが、唯一の神の超越性と矛盾することに自覚的であったことが分かる。しかしながら、トルチアが指摘するように、ここでは質料を含めて「無から」創造されるという議論はなく、またプラトンの『ティマイオス』解釈に基づく創造論に、依然として依拠しているものと理解できる。タテイアノスは全ての存在の根拠である神に質料を従属せしめたが、ここで創造論に関して二つの議論の発展が考えられる。一つはこのような神と質料との関係をより一層明確に体系づけることであり、もう一つはここまで問題とされてきた「質料からの創造」、即ちプラトンの「ティマイオス」解釈に基づく創造論をキリスト教思想の中で保持すべきなのかを今一度吟味することである。前者はテオフィロスにおいて、後者はエイレナイオスやテルトウリアヌスにおいて議論が確認される。

五 テオフィロス

タティアノスは被造物である万物と同様に質料もまた神自身によって創られたものであることを主張した。この解釈は、彼と同時代、もしくは若干遅れて活躍したとされるテオフィロスの記述の中にも見出される。但し両者は同一の主張ではなく、テオフィロスは、タティアノスの主張よりも更に明確な形でプラトン主義的質料観及び創造論を批判し、預言者の言葉を借りながら『創世記』における神の創造を、「無から質料の創造」そして「神によって創り出された質料から世界を創造」と整理付けることによって、質料が神と「等しく存在する」可能性を徹底的に排除しようと試みる⁽²³⁾。

「(預言者である)彼らは、最初に声を揃えて我々にこう教えた。存在しないものから(ἐκ οὐκ ὄντων)万物を神は創り出したのだ。と。何故なら神と等しく存在したものは(ὅμοιοθεῶς συνκείμενα)はないからである。……最初に神の書物は(τὴ θεῖα γραφή)このことを教えている。すなわち、質料が生み出されることで、神によって生み出されることによって(質料が)現れ(ἀναφαινοῦσα)その質料から神は世界を造り(μενοίνετο)創造した(ἐδημιούργηκεν)のである」と(Ad Aut. II. 10. 1-10.)⁽²⁴⁾。

「プラトンと彼の分派にあたる者たちは次の点で一致している。すなわち神とは生まれざるもの(ἀγένετος)であり、父であ

り、あらゆるものの造り主(τοῦτ᾽ἐστίν)であるということである。それから神は生み出されず、質料も生み出されないと主張し、質料が神と等しく存在していると述べていた。だが、もし神が生み出されず、質料も生み出されないとしたら、プラトン主義者たちの言うように神があらゆるものの造り主であるということにはならないし、彼らが言うような神の単一支配(μοναρχία)が示されることもない。そして神が生み出されず、不変のものであると同様に、もし(仮に)質料もまた生み出されないのであれば、(それは)不変で、神のようなもの(τοῦθεοῦ)になつてしまうのである」(Ad Aut. II. 4. 4-6.)

タティアノスの質料観と比較するならば、テオフィロスは神が創造を行う際の質料の位置づけを、より明確に述べている。即ち彼は、神のみが永遠に存在し、質料とは宇宙万物が造られる以前にその材料として神によって「存在しないものから」、つまり「無から」造り出されていたものである、と理解するのである。これはプラトン主義における「(永遠なる)質料からの世界創造」観を明確に否定し、質料をも含めた万物に先立つ神の存在による創造を、あらゆるものに対する「神の単一支配」として描いているのである。この「単一支配」とはテオフィロスにおいて神の超越性と結びつけられ、神の「強大な力」として被造物である人間と比較される過程でより一層明瞭なものとなっている。

「……だが、もしも神が(プラトン主義者たちによって)主張

された(ような)質料から世界を造り出したのであれば、それは偉大なことなのであろうか。何故なら、人間の職人もまた何かから質料を(材料として)取りだして、この(質料)から(造ろうと)したものを造るからである。……人間は彫像(εἰκών)を造るが、自らの生み出したものに対して理性(λογος)や氣息(πνοή)や感覺(αἰσθησις)を与えることは出来ない。だが理性をもつもの、息をするもの、感覺をもつものを造り出すという点で、神は人間よりも偉大なものを持つている。従って、こうしたあらゆる点において神は人間よりも力あるもの(Governing)であるのと同様に、存在しないものから存在するものや全ての(造ろうと)したものを造り出すこと、そして造り出したという点でも力あるものなのである」(Ad. Ant. II, 4, 7-9)。

テオフィロスにおいて、神の「単一支配」とその力は、まさに「存在しないものから造り出す」という点、及び理性を持ち、氣息し、感覺能力を持つような生命そのものを創り出すことが出来るという点に現れているのである。初期キリスト教の教会において、「無からの創造」という議論は、現存する資料によるならば、ここで初めて明確化したと言える⁽²⁶⁾。勿論、テオフィロスが活躍したとされるアンテオキアにおいては、バシリデウスに関する記述などに見られるように「無からの創造」という思想そのものは既に彼以前よりあったことは指摘されるべきであろう⁽²⁷⁾。しかしながら、キリスト教を取り巻くヘレニズム世界

において「アルケー」として永遠なものとなっていた質料からの「創造」に対し、テオフィロスが「唯一の神の支配」とその超越性というキリスト教独自の思想を確立するためにこの「無から」という思想を明確にした事は、神の創造論の教義史上、看過すべきではないと言えるだろう。

六 エイレナイオス

テオフィロスにおいて明確となった「無からの創造」論、すなわち神は無から質料を創り出し、その質料を用いて世界を造り出したという創造論は、そのままの形でキリスト教世界に受けられたのではない。彼とほぼ同時代に活躍したエイレナイオスにおいて、「無からの創造」という議論は、テオフィロスとは異なる視座と意義を内包している。

確かに、人間の能力を超越する神の業として、この「無からの創造」が理解されている点は、テオフィロスと同様にエイレナイオスにも見いだされる⁽²⁸⁾。

「人間は無から(De nihilo)何かを創ることはできず、既に存在している質料から(De materia subiacenti)しか造れないからである。これに対して神は、それまで存在しなかった(ante nosse)質料を、創造の際に自分で創り出すという点において、人間を遙かに凌駕しているのである。しかしながら、(この)質料が誤ったアイオーンのエンテュメーシス(思い)から(De

Erthymesi Aeonis) 發出した……などと言ふことは、信じられなかつ、愚直でもあり、あり得ず、不確かなものである」(Ad. Haer. II. 10. 4.)

既に確認したように、テオフィロスは神が無から(万物の材料としての)質料、そしてこの質料から万物を創造するといふ二段階の順序を明確にしていた。これにエレナイオスが類似しているのは、彼もまた、神が無から質料を創り出したという点である。ここでは、神による質料の創造が、人間が何かを作り出す過程と対比されているが、この議論そのものはヴァレンティノス派の質料観、すなわち最も若いアイオーンであるソフィアが過ちを犯すことで質料が發出するという、グノーシス的な神話体系を批判する目的で進められている。しかしながら、エレナイオスの記述を總体的に分析するならば、彼自身はこのようなプラトン主義的、かつグノーシス的「質料」からの創造そのものに対して懐疑的な立場を示しており、彼は質料を、万物を構成する物質的な要素、もしくは材料として必ずしも不可欠なものとは捉えていないと考えられる。

「グノーシス主義者たちは) 質料の本質の由来 (unde substantia materiae) について十分に説明することが出来たと考えているようだが、神が自らの意志と力を本質として (sua voluntate et virtute substantia) 用ひて、望むままに存在しないものか、(ex his quae non erant) あらゆる被造物を創つたといふことは信じていないのである。彼らはまさしく自らの

不誠実さを示しながら、偽りの言葉を拾い集めたのである」(Ad. Haer. II. 10. 2.)

エレナイオスにとつてはむしろ、神が無から創り出したものは質料というよりも被造物そのものであると理解できる。彼にとつて、仮に質料があったと考えられるならば、それは当然神が無から創り出したに違いないが、そのような質料の存在は彼の創造論において議論の中心にはなり得ないのである。

「もし我々が質料の存在について主張するならば、神がそれを生み出したのであり、我々は間違つたことを言つてはいないだろう (non peccabimus)。というのも、神が全てのものの上に立つことを我々は聖書から (ex scripturis) 知っているからである。(しかしながら) 神が何処から、どうやって質料を生み出したのかについて、聖書は説明してはいないのであつて、我々はこれについて……妄想をかき立ててはならないのである」(Ad. Haer. II. 28. 7.)

ここでの文章も、明らかにヴァレンティノスの弟子たちなどのグノーシスへの批判が込められている。既に確認したように、彼らは質料の發出を、そしてこの世界の生成を複雑な体系を持つ神話によつて説明しようと試みている。しかしエレナイオスによれば、そのような宇宙生成論は預言者から受け継がれた聖なる書物に拠るものではない。聖書には質料による創造は何処にも記述されていないのである。従つて、「無からの創造」論においてエレナイオスが強調する点は、グノーシスやプラト

ン主義との関係上問題になっていた質料について朗々と説明を施すことではなく、更に質料を媒介にした宇宙生成論を体系化する事でもない。これらを聖書が明らかにすることは、彼にあれば妄想に頼る以外、永遠にあり得ないからである。むしろ、神が自らにとって外在的なイデアや質料などに頼ることなく、唯一人「自らの意志と力によって」創造したということ、そしてその際に神は自らにとって内在的な御子と聖霊、即ち言葉と知恵を用いたことが、彼の創造論の核心であると言える。

「ただ父のみがあらゆるものを創造し、見えるものも見えないものも、……天のものもこの世のものも、御自分の力ある言葉 (verbum virtutis suae) と御自分の知恵 (sua sapientia) によって全ての物を結びつけ、秩序付けたのである……」(Ad. Hebr. II. 30. 9.)。

エイレナイオスにとつての「無からの創造」とは、神の御子である言葉が万物の存在を呼び起こし、それを神の知恵である聖霊が秩序付けるという神性の諸関係を明確にするためのものである。ここでは父と子、そして聖霊に関する神論が展開されているのであり、我々がユステイノスから概観してきた創造論は、アルケーとしての質料から「無からの創造」へと展開しながら、エイレナイオスにおいて宇宙の生成を説明する宇宙論(コスモロジー)から神論(テオロジー)へと移行するのである。

七 テルトウリアヌス

創造論をギリシア世界的宇宙生成論からキリスト教独自の神論において論じようとするあり方は、エイレナイオスからテルトゥリアヌスによって引き継がれている。彼が論駁した相手は多岐にわたっているが、特にグノーシスの傾向を持つヘルモゲネスとの論争において、「神 (deus) と言葉 (sermo) と知恵 (sophia) による創造」というエイレナイオスに類似した形で彼は「無からの創造」論を展開している。

「神は最初だ、思考し (cogitando)、秩序づけることによつて (disponendo)、知恵におおづ (in sophia) 創造したのである。……どうのうのも、思考と秩序付けは、知恵の最初の業 (prima sophiae operatio) であり、(知恵は) 思考から (創造とどうのう) 行為への道を開くものだからである」(Ad. Hebr. 20. 23.)。

「万物は言によつて成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。このように、神である創造者は、万物である被造物を、言葉によつて (per quem, id est sermo) (創) ったと述べられているのであるから、もし何か(質料)のようなものから万物が造られたのであれば、何から万物が神によつて (a deo)、言葉を紹介して (per sermonem) 造られたのかという(論理的な)筋道 (ordo) も明かさなければならぬ。ならぬのではないかね」(Ad. Hebr. 20. 4-5.)。

テルトゥリアヌスは神の創造という行為を「知恵」において

秩序付け「言葉」を介して万物を形成したものと解釈している。彼は「言葉」に関してヨハネ福音書を引用し、それが聖なる文書に由来する解釈であることを示すことによって、同時に聖書には述べられていないヘルモゲネスの「質料からの創造」という解釈を批判しているのである。

しかし、ここでヘルモゲネスを論駁するにあたってテルトゥリアヌスが直面していた問題は、エイレイオスが直面していたものとは異なつた論点を包含していた。テルトゥリアヌスが対峙したヘルモゲネスは神義論的問題、すなわち「悪はどこからやって来たのか」という問題を解こうという試みにおいて「質料からの創造」を語っており、彼は唯一の神によつて造られたこの世界において我々が経験する悪を質料に由来するものと理解した。すなわち材料の欠陥 (*vitium*) によつて、神によつて造られたものの中に悪が含まれるようになったと彼は結論づけるのである。ここで、既にエイレイオスらが批判していた「永遠なる」質料からの創造」とは、物質的世界における悪の責任を、創造者である神から創造の素材となつた質料に転嫁させる意味を持つようになり、他方で「無からの創造」を説くことはこの世の悪の全責任を唯一の神に帰することになつてしまつたのである。

このような解釈に対してテルトゥリアヌスが保持した態度とは、このような異端的思想家たちの挑発には乗らないことであり、彼は「悪の由来」という神義論的な問題そのものを解こう

とは試みない。

「必要から (*necessitate*) というよりも、意志によつて (*voluntate*) 創造したという方がずっと神にふさわしい。即ち、質料から (*ex materia*) よりも無から創造したと考える方が (神にふさわしいのである)。たとえ悪を造り出した者 (*malorum auctor*) であつても、神が (質料などの) 奴隷であるよりは、神が自由 (に創造した者) であると信じる方が妥当である」 (*Ad Her.* 14. 2.)。

彼にとつては、神が悪を創造したことよりも、神が創造の為に質料の力を借り、その力に隷属することの方が問題であると言える。彼が懸念するのは、質料やイデアのような神と同等の存在が要請されることによつて、神の卓越性 (*summum*) が損なわれてしまうことなのである。

また仮に神が質料から創造を行い、ヘルモゲネスの主張するように質料が悪であれば、そこから生まれたものは全て悪しきものでなければならぬ。しかしながら、神の被造物は良いものも悪いものも存在する。ならば、質料が悪でも悪でもないか、もしくは神は質料を用いずに被造物を造り出したと考えるべきであろう。テルトゥリアヌスはこのような反証を挙げてヘルモゲネスを論駁し、「質料からの創造」を論理的「一貫性のないもの」と捉え、その対概念としての「無からの創造」を弁証する。

「したがって私はこう主張しよう。たとえ聖書が明確にあらゆるものが無から造られたと語っていないとしても、無から万物

を造つたことを示す差し迫つた必要がなかったのである。……しかし、もし質料から万物が造られたのであれば、必ず我々に示されねばならない。というのも、質料は起源を持つに違いないからである」(Ad. Her. 21. 2-4)。

始まりを持たず、永遠なるものは神のみである以上、質料はどこかに起源を持たねばならない。神の創造について正しく語っている聖なる書物には、確かに無から神は創造を行ったとは書かれていないが、質料からとも書かれてはいない。無に關して特別な注釈は必要ないが、神が質料を用いた場合、神の質料や万物に対する超越性を示すためにも、質料の起源に関する注釈が必要とされる。したがってテルトゥリアヌスは、論理的に一貫性を保持するのが困難な「質料からの創造」よりも、「無からの創造」の方が神にはふさわしいと理解するのである。ここではエイレナイオスと同様に、彼もまた聖書に記述されて⁽¹⁾いない「質料」を創造論の中心に置くことを避けようとしている⁽²⁾と考えられよう。

八 結語

「無からの創造」とは、プラトン主義やグノーシスに見られる「質料からの創造」観からキリスト教が独自の創造論を確立する過程において発展した解釈であるということが出来よう。初期の教父たち、特にユスティノスにおいては、アレクサンドリア

無からの創造(津田)

のフィロンと同様に、神がアルケーとしての質料を用いて創造を行ったという思考は「創世記」における神の創造の記述を補うものと捉えられ、特に永遠なるものとしての質料に対して問題意識が注がれることはなかった。しかしながら、タティアノスは神と質料という二つの永遠なるものと、唯一の神の超越性との矛盾を露呈させ、テオフィロスは「無から」神によってその質料が生み出されたものとして理解し、質料の起源を神に従属させ、神の「単一支配」を保持しようとした。エイレナイオスやテルトゥリアヌスは聖なる書物に述べられていないこうした「質料」観からの脱却を試み、質料に依らない無から、神が言葉と知恵によって創造を行ったとする神論をここで展開した。このように「無からの創造」とは、ユスティノスに見られるようなキリスト教の護教的観点からギリシア思想を受容していた思潮が、その影響を強く受けたヴァレンティノス派などのグノーシスとの対峙から、ギリシア思想からの離脱を余儀なくされた過程で徐々に輪郭を与えられた議論であると言える。

註

(1) エイレナイオス『異端反駁』II.10.4. 尚、出典はルカ一八・二七。

Irenaeus von Lyon, *Adversus Haereses*, hg. von N. B. B. Brox, Fontes Christiani, Bd. 8, Freiburg 1993.

(2) 「無からの創造」の教義史的研究には、マイの緻密に練ら

れた労作がある。一九七〇年代と、やや古くなったけれどもた著作ではあるが、単に教父の文献を纏めるようなものではなく、グノーシスやプラトン主義的宇宙論などとの比較に重点を置き、紀元後二世紀前後の創造論を体系的に描き出している。

May, Gerhard, *Schöpfung aus dem Nichts. Die Entstehung der Lehre von der creation ex nihilo*, Berlin 1978, S. 1-25.

近年の研究では、トルチアが創造論を中期プラトン主義の背景から捉え直す試みをしている。彼はキリスト教と中期プラトン主義における創造論の類似性を指摘しながらも、中期プラトン主義で創造とは神が質料に秩序を与え、これを主眼に置くのに対し、キリスト教においては神の創造が全くの無から存在を成り立たせる根拠になっていると、こう相違を指摘している。

Torchia, Joseph N., *Theories of Creation in the Second Century Apologists and their Middle Platonic Background*, in: *St.Patr.*, 1993, pp.192-199.

本小論では、ファンティノなどの最近の教父研究などを参照しながら、マイヤールチアが殆ど触れなかったテルトゥリアヌスにおける創造論を研究の対象として扱い、「無からの創造」という思考がグノーシスや中期プラトン主義との影響の下でどのように発展してきたかを考察する。

- (3) May 1978, S.1-25.
- (4) May 1978, S.VIII-XI. 及び 'Fantino, Jacques, *L'origine de la doctrine de la création ex nihilo*, *A propos de l'ouvrage de G. May*, in: *Rev. Sc. ph. th.*, 80, 1996, p.590. マインはユダヤ教における思潮の意義を認めつつも「無からの創造」という思考は、キリスト教とギリシヤ哲学との折衝から成立したものと理解している。
- (5) プラトン『ティマイオス』二七〇—三二B。
- (6) 特ピヤノンの説として由来しているものなど。 e.g. *Stoicorum Veterum Fragmenta*, Joannes ab Arnim (ed.), Leipzig 1905, I. 88.
- (7) May 1978, S.9-12.
- (8) 柴田有『教父ユスティノス』勁草書房、二〇〇六年、一一—三二頁。
- (9) 『ユダヤ人トルコフキョンの按語』八・11 'Iustini Martyris, *Dialogus cum Tryphone*. Miroslav Marcovich (ed.), PTS, Bd. 47, Berlin 1997.
- (10) May 1976, S.125.
- (11) Iustini Martyris, *Apologiae pro Christianis*. Miroslav Marcovich (ed.), PTS, Bd. 38, Berlin 1994.
- (12) 中期プラトン主義とは広義の概念であり、そこに含まれる思想家によって「創造論」の解釈にも差異がある。ここでは主にティロンなどが分類するガイウス学派を中心として

て、アルキノスをプラトニウスの行ったプラトン解釈を批判した。Alcinoos, *Enseignement des Doctrines de Platon (Didaskalikos)*. John Whittaker (ed.), Paris 1980; Apuleius, *De Platone et eius dogmate*, Paolo Siniscalco (ed.), Sankt Augustin 1981. cf. Dillon, John, *The middle Platonists*. A study of Platonism 80 B.C. to A.D. 220, London 1977.

- (13) 『エッセイ入レロソフンケントウの按註』五・四。
 (14) E. F. Osborn, *Justin Martyr* 1973, p.46.
 (15) アルキノス『プラトン哲学要綱』X・一六二―二九一三九、マンレノウス『プラトニウスの教えをどう読む』I・五。
 (16) May 1976, S.125; Torchia, N. Joseph, *Creatio ex nihilo and the Theology of St. Augustine*. New York 1999, p.8.
 故に、エッセイノスの場合、(永遠なる)質料からの創造や語の一方で、神のみが永遠なる存在であるという矛盾を問題と見なしてならぬのである。「なかなら神の後から存在するもの、あるいはこれからいつか存在するもの、あるいはこのものは、消滅する性質を持ち、かかるものとして抹消され、もはや存在しなくなる。ただ神のみが生まれざるものであり、不滅である、そしてそれ故に神なのである」(エッセイノス『エッセイ入トリュンフォンとの対話』V・四参照)。
 (17) Torchia 1993, pp.194-195.
 (18) Tatian, *Tatiani Oratio ad Graecos*. Miroslav Mar-

covich (ed.), PTS, Bd. 43, Berlin 1995; Tatian, *Oratio ad Graecos*. Moolly Whittaker (ed.), Oxford 1982.

- (19) Whittaker 1982, pp.x-xvii; Torchia 1993, pp.194-195.
 タチアンはプラトン主義に限らず、ヘラクリトスのキリニア悲劇やマリヌス・マキヌスのキリニア喜劇などを引用、そして批判しながら、キリニア文化全般に対して批判的な態度を取る。しかもながら、マルキアが指摘するヘラに、タチアン自身は依然としてプラトン主義的宇宙生成論、つまり「質料」からの創造という考え方に依拠している。
 (20) アルキノス『プラトン哲学要綱』X・一六二―二四一―六六―一四、マンレノウス『プラトニウスの教えをどう読む』I・五―七。

- (21) Torchia 1993, pp.194-195.
 (22) May 1978, S.159-167; Torchia 1993, p.195.
 (23) Theophili Antiocheni, *Ad Autolycum*. Miroslav Marcovich (ed.), PTS, Bd. 44, Berlin 1995.
 (24) テキストの執筆された背景、及びその記述の内容を鑑みる限り、特に同時代の中期プラトン主義のことを指していると考えられる。マイはこれに加えて、テオフィロスの活躍したとされるマンティオキア周辺において活動していた異端的キリスト教思想家であるホルモゲネスを論敵として指摘している。May 1976, S.160.

- (25) テオドロス『パウロニコスな来』II・A。タテイ
ノスの議論をテオドロスが発展させた点について、この
「神の唯一性」を加えて、ローザ「神の不交神」「神の尊
大」の二点を挙げている。May 1976, S.163-164.
- (26) May 1978, S.159; Torchia 1993, p.195.
- (27) May 1978, S.68.
- (28) Cf. Fantino 1994, pp.276-277.
- (29) ヲロト用するキリスト教、ロマン主義の歴史に就いて
ne° Irenaeus von Lyon, *Adversus Haereses gegen die
Haeresien*. Norbert Brox (Hg.), *Fontes Christiani* 8/2,
Freiburg 1993.
- (30) ヲロトが「時間的な歴史」を説くへ考えられたように、マ
ウソキネイスは必ずその radices temporum の議論を未だ
見いだせない。片柳榮一『初期アウグスティヌス哲学の形
成』創文社、一九九五年、三八四―三八六参照。
- (31) エイレナイオス『異端反駁』I・II・I―IV。ウァレン
ティヌス派、特にその中心人物ヘルモゲネス派の思想とい
うことは、理解をなす必要のないところ。cf. Markschies,
Christoph, *New Research on Ptolemaeus Gnosticus*, in:
Zeitschrift für antikes Christentum. 4, Berlin 2000, S.249-
252.
- (32) Fantino 1996, p.594.
- (33) May 1978, S.177.
- (34) cf. Fantino 1994, pp.279ff.; Fantino, Jacques, *La créa-
tion ex nihilo chez saint Irenée*, Etude historique et
théologique, in: Rev. Sc. ph. th., 76, 1992, pp.428-433.
- (35) エイレナイオスが「言葉と知恵」則ちキリストと「別」
箇所と神の両手を例えて議論を展開している（エイレナイ
オス『異端反駁』II・II〇・I―II・IV）。cf. Fantino 1992,
pp.433-434.
- (36) Fantino 1996, pp.593-595.
- (37) 『キリストの身体について』と他の異端反駁書とを比べて
テレートリマヌスは神論を創造論に限らなかつ、多くの点でエ
イレナイオスの思考を必ず継いでいる。cf. Osborn, Eric,
Tertullian, First Theologian of The West. Cambridge
1997, p.62.
- (38) 特にゴッポリヤトスなどに於いて、ヘルモゲネスは古代
からノニシスとして捉えられてきた（ゴッポリヤトス『全
異端反駁』III・I7・I―IVなど。cf. Greschat, Katharina,
Apelles und Hermogenes. Zwei theologische Lehrer des
zweiten Jahrhunderts, Leiden 2000, S.144-145.）したが、
彼の思想は必ず、創造神をノニシスと捉えなかつ、
ミナルトスの側面を持たないノニシスに多く見られ
る反宇宙論も見出されなかったため、ノニシスに位置づけ
ることは、この限りでは難い。
- (39) Quintus Septimius Florens Tertullianus, *Adversus*

Hermogenem, Aemilii Kfoymann (Hg.), in: *Quinti Septimi Florentis Tertulliani Opera I*, CSEL., vol. 47, 1904 pp. 177-212; Tertullien, *Contre Hermogène*. Frédéric Chapot (ed), SC. 439, Paris 1999.

- (40) テルトゥリアヌス『ヘルモゲネス反駁』二・一―三・一。
- (41) テルトゥリアヌス『ヘルモゲネス反駁』二・四。
- (42) …… materiam cum creatore proponunt, ut malum a material, non a creatore deducant. …… (テルトゥリアヌス『ヘルモゲネス反駁』一〇・一)。
- (43) Cf. Osborn 1997, pp.183-187.
- (44) テルトゥリアヌス『ヘルモゲネス反駁』四・五。
- (45) *ibid.* 12ff.
- (46) テルトゥリアヌスも、先に見たエイレナイオスも同様に、創造論から「質料」の議論を排除する事で、本来の聖書の記述に立ち戻ろうとしている。しかしながら、彼らの説く言葉（ロゴス）や知恵（ソフィア）が神の創造の媒介になったと理解されるならば、この議論そのものがヘレニズム的なアイデア論の影響を受けていることは明白である。それにも拘らず、彼らがアイデアと対になるべき質料のみを排除することで議論を汲み尽くすことが出来たと考えたのか否かに関しては、更なる詳細な研究が必要であり、今後の課題としたい。